

白峰村における出作り地の土地利用について

岩 田 憲 二 石川県白山自然保護センター

THE LAND USE IN THE DEZUKURI IN SHIRAMINE-MURA

Kenzi IWATA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

はじめに

白山麓の白峰村では、古くから焼畑や出作りといった、平野部では見られない農業生産形態が存在し、村の大部分の人達がそれらに従事していた。焼畑は、当地ではナギハタ（雑畑）とよばれ、山地斜面の雑木を薙ぎ払って数ヶ月放置して燃えやすくしたあと焼き払う農業である。一方出作りとは一種の居住形態を意味し、夏季（4月～11月）に母村を離れて家族そろって山中でナギハタや養蚕をし、冬季（11月～4月）には山を下りて母村で生活することをいう。

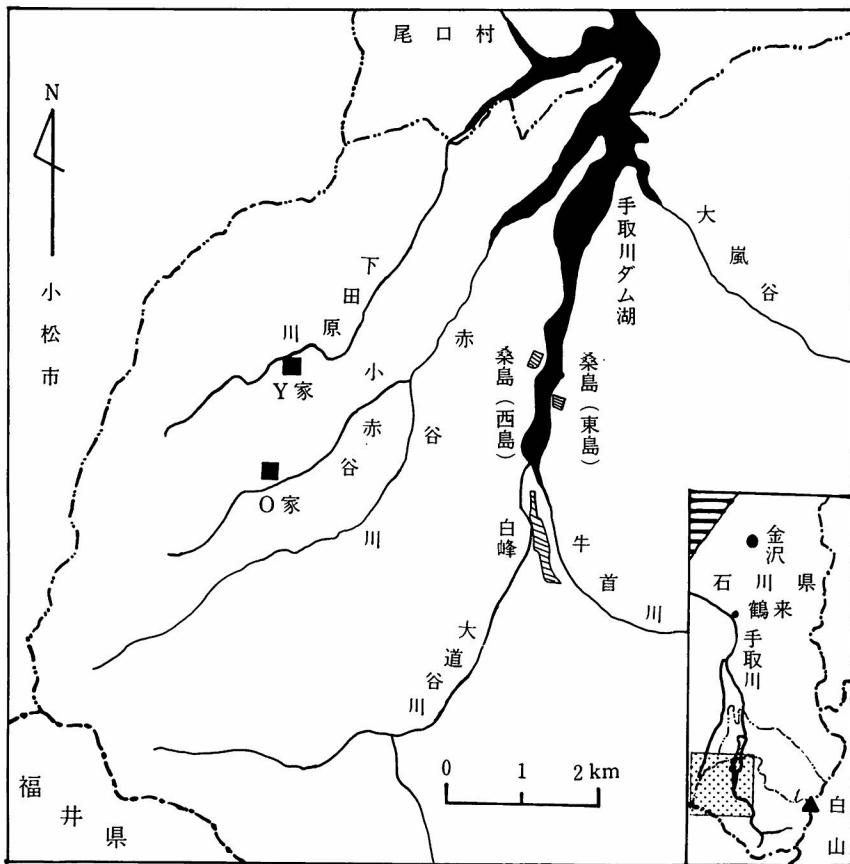


図1 出作り地位置図

こうした山村独特ともいうべきナギハタや出作りは、高度経済成長の影響が全国津々浦々まで波及した昭和35年あたりから急激に衰退し始めた。現在白峰村では出作り従事者は10戸に満たず、ナギハタについてはほとんど消滅してしまった。本調査では、白峰村に僅かに残っている出作り地を例として、その土地利用を明らかにすることを目的とする。事例として、下田原のY家、小赤谷のO家を紹介する。今回の調査で取り上げた出作り地は、いずれも白峰村地内にあり、共に手取川の支流（下田原川と小赤谷）を溯った河畔にある。出作り適地の条件として一般に、雪崩の危険性が少ない、水の便が良い、キャーチ（常畑）のための平坦地があること等がいわれている。

この他、出作り地での商品生産、及び出作りの起源についても言及したい。

出作りの事例Ⅰ——下田原のY家

Y家のある下田原は、元々は牛首十八ヶ村の一つで、明治22年(1889)に桑島、白峰(旧牛首)と合併して白峰村大字下田原となった。明治22年の合併時、下田原には12戸・50人が居住していた。この数字は江戸時代とそれほど変動がないとされている。昭和初期には戸数14戸であったが、桑島から下田原地籍内への出作りが20戸ほどあった(加藤, 1935)。昭和30年代初期には、8戸・48人(内2戸は冬季出稼)と減少し、その他に桑島からの出作りが13戸あった。この様に、下田原には桑島からの出作りが多く、今回調査対象となったY家も母村は桑島であった。現在では、Y家を含めて下田原には出作りが3戸(Y家の他、林業従事者2戸)残るのみである。

Y家は下田原川を約8km溯った右岸の河岸段丘上に位置する。河岸段丘上の平坦地は約0.4haあり、大体その半分がY家の宅地、農地、その他となっている。Y家は代々桑島から当地に出作りに来ていたが、手取川ダムで桑島が水没したため、金沢へ移った。現在、Y家当主(80才)夫婦のみが、毎年大体4月末～11月中旬まで下田原の出作り小屋で生活している。Y家の標高は約720mで、植生でみるとブナ帯になっており、白山麓では出作りが最も集中する植生帯である(岩田・山口, 1982)。出作り地の背後は急峻な山腹斜面となっているが、斜面上部から尾根にかけてはブナやミズナラを中心とする落葉広葉樹の自然林が残されており、雪崩の心配は少ない。斜面下部は、ナギハタ跡地の証左ともいえるスギの造林地となっている。また、下田原川対岸の湧水地から年中涸れることのない水をホースで引いており、水の便は極めてよい(図2)。

以上のY家の立地条件を考えると、出作り地としては良好な部類に入るものと考えられる。また、モータリゼーションが発達した今日では、車道に近いという条件も好都合といえる。

さて、Y家のキャーチの土地利用であるが、その前にキャーチの語源について考えてみたい。白峰では一般に、出作り小屋の周囲の常畑のことをキャーチと呼んでいるが、その語源は定かでない。白峰村の古老によると、キャーチとはカイチ(開地)、つまり開いた土地という意味からきたとのことである。愛知県の三河山間部にはカイト(垣内)という小地名が数多く残存し、また、福井県大野郡でもカイツという言葉が熟畑を表わしているから(千葉, 1983)、キャーチもおそらく土地利用方式——平坦部を常畑として利用——にもとづいて発生したものであろう。

Y家のキャーチの作付面積の合計は約3アールである。実測は昭和58年10月24日に行ない、この時点で収穫が終わっていた数種の野菜(トマト、シソ、キュウリ、ナス、カボチャ、チシャ)の作付面積も総計に含めた。春から秋にかけてキャーチで栽培されるのは、野菜15種類、穀類3種類の合計18種類の作物で、すべて自家消費用に栽培されている。これらの作物のうち、マメ(大豆のこと)とアズキは、かつてY家のムツシ(ナギ畑適地のこと)においても栽培されていたが、現在はキャーチのみで栽培されている。また大根は、ナナギと呼ばれる小規模な夏焼きのナギハタによっても栽培さ

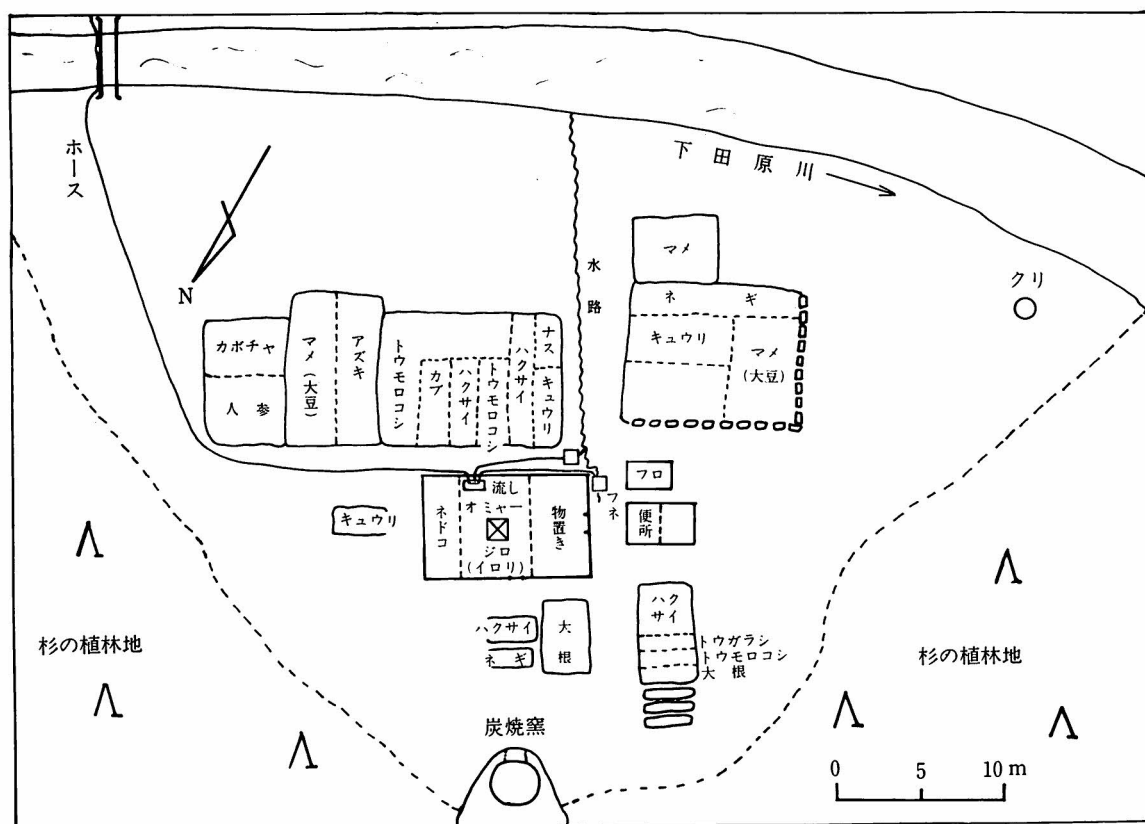


図2 Y家の出作り地 (S. 58, 10, 24 実測)

されている。Y家のナナギ大根用のムツシは約1反5畝で、下田原川をはさんで出作りの対岸の斜面にある。キャッチで作る大根よりもナナギ大根の方が味が良いそうである。ナナギ大根の栽培を簡単に紹介すると、6月ごろに夏焼きのための草蒔りをし、7月末～8月上旬の天気の良い日に火入れをする。そのあと種を播き、11月上旬に収穫できる。この他にY家の出作りには炭焼き窯があり、毎年自家消費のみ焼いている。昭和30年代前半ころまでは、Y家でも1,000俵前後焼いていたそうだが、現在では出作りに従事するのがY家老人夫婦のみのせいもあって自家用を製炭するだけにとどまっている。また、出作り小屋から少し離れた川べりにはクリの木があり、毎年秋に多量のクリの実が収穫される。このクリの実も自家用のみで換金されることはない。

Y家の出作り小屋は木造茅葺三階建の合掌造りである。建坪は約18坪（3間1尺×5間4尺）で、建築後100年以上経過している。一階はネドコ（寝室：3間1尺×1間1尺）、オミヤ（居間：3間1尺×2間3尺）、物置き（3間1尺×2間）の三部屋にわかれており、オミヤの中央にはジロ（イロリ）がある。三階は天井部分が合掌屋根になっており、いわば屋根裏部屋にあたる。ここも二階と同様かつて養蚕に使われた部屋である。給水については、下田原川対岸の湧水がホースで引かれ、流し台を經由して屋外のフネに一旦溜められ、その後川に排水される。また炊事等の生活排水も流し場からホースで別のフネに溜められてから、川に排水される。二階は床・天井面積が一階と同じであり（つまり2階の天井と軒の高さが同じ）、25年くらい前までは養蚕に利用されていた。

出作りの事例Ⅱ——小赤谷のO家

O家のある小赤谷は白峰村字桑島地内にあり、手取川の支流の赤谷のそのまた支流である。現在小赤谷にはO家が出作りで居住するのみで、他に住人はいない。小赤谷には昭和30年代初期に、桑島を母村とする出作りが5戸・32人あり(その内O家のみ母村が勝山)、それらを含めて赤谷川流域には22戸・138人が当時住んでいた。下田原と同じくこの地域のほとんどが桑島を母村とする出作り者であった。昭和9年の大水害以前には、夏冬あわせて通年居住の者はO家を含めてかなりいた。

O家は国道157号線分岐(赤谷大橋)から赤谷を約6km溯った地点にあり、支流の小赤谷左岸の河岸段丘上の平坦地に出作り小屋が建っている。その平坦地は、Y家と比べると狭く、また、崖も急である。O家もまた当主(74才)老夫婦のみが出作りに従事している。O家の当主は4代目で、代々小赤谷に居住し、主に杉苗作りに従事してきた。昭和9年の大水害以後、O家は勝山市に居を移して、夏季のみ小赤谷に出作りにくるようになった。Y家と同じく大体4月末から11月中旬までの間が、O家の出作り期間となっている。O家の標高は約700mで、Y家同様ブナ帯下部に位置しており、周辺には落葉広葉樹が見られる。前述のとおり、ブナ帯下部は白山麓で最も出作りの多い地帯であり、O家のある小赤谷、及び赤谷は典型的な出作り地帯といえる。O家の背後は約30度の斜面で、杉苗畑になっている。O家では、人工の水路により谷川から水をひき、杉を半割りにしたトエ(樋)とフネにより天然の飲料水を得ている。フネをオーバーフローした水と出作り小屋から出る生活排水は、人工水路により小赤谷に流出する仕組みになっている。こうした環境を考えると、Y家と同じくO家の立地条件は出作り地としては良好とも思える。しかし、出作り地と小赤谷の間が急崖になっているため平坦地が比較的狭少なことは、キャーチでの作物栽培をY家のものよりも小規模にしている(図3)。

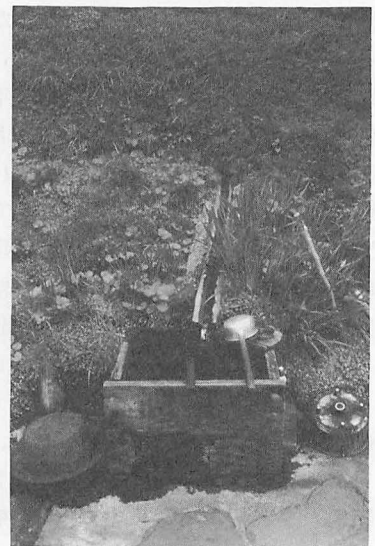
O家のキャーチの作付面積は約1.6アールあり、Y家のキャーチの約半分となっている。実測は昭和58年9月22日に行ない野菜6種類、穀類3種類の計9種類栽培されており、



写真1 Y家の出作り小屋



写真2 O家の出作り小屋

写真3 O家のフネ
(約50cm立方のクリ製の水溜)

これもまたY家の半分である。作物がすべて自家消費用なのもY家と同じである。O家とY家が異なるのは、近年になってもO家が商品作物栽培に主力を置いていることである。O家の杉苗作りは100年以上の歴史を持ち、最盛期の昭和45年には0.5~0.7 haの火入れ地（作付面積と同じ）から8万本の杉苗が生産され、出荷されたが、昭和48年には出荷が5万本に減少し（橘，1981），昭和58年は更に作付面積約5アール，出荷本数3,000本に激減した。O家老夫婦の高齢化につれて杉苗の生産は年々減少し、今年でおそらく最後になるようである。現在の杉苗の作付地は4年前に火入れしたところであり、昔から杉苗の栽培はナギ畑跡地または火入れ後2年ほど休閑した土地で行なわれてきた。杉苗は3年生（発芽3年目）になると出荷されるが、成長の遅いものは4年生になってから出荷される。この他にはY家と同じくクリの木が小赤谷河畔にあるが、これも自家消費用である。O家の土地利用図には記載されなかったが、更に奥地に商品栽培用の畑地も数アールある。

O家の出作り小屋は、Y家と同じく木造茅葺三階建の合掌造りで、建坪は約16.4坪（5間1尺×3間1尺）あり、建築後約100年経ている。一階はオミヤー（居間）兼ネドコ兼作業場となっており、中ほどにジロ（イロリ），奥に仏間がある。一階，二階はかつて養蚕に利用されていたが、Y家と異なり、O家は合掌部分が二，三階になっている。

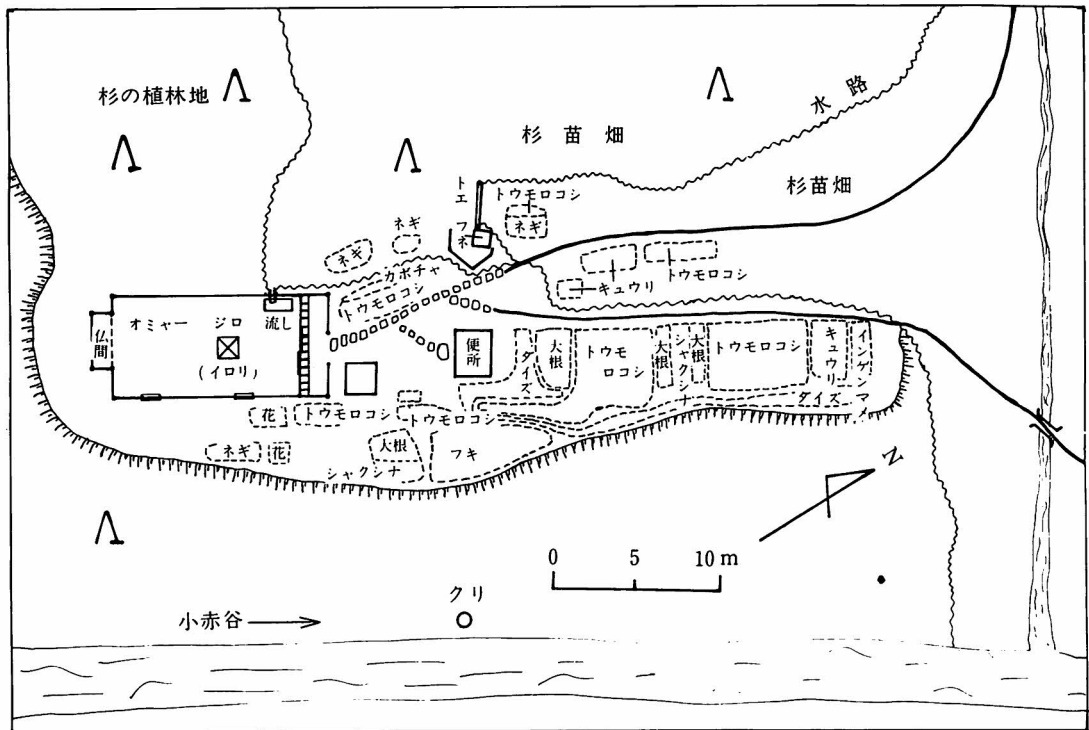


図3 O家の出作り地（S.58.9.22実測）

Y家・O家の出作り地の比較

これまでみてきたY家，O家は，白峰に現存する数少ない出作りの実例である。今日みられるY家，O家の出作り生活の実態は，昭和30年代以前の出作り最盛期のころの生活とは程遠い姿をみせてお

り、この小論で紹介した内容は衰退・終末段階の作り景観を示していると考えられる。しかしながら、終末段階の作りではあっても、両家の作りにおける生産構造には明確な差異があったことが図2、3から認められる。

一般に「作り生活」に対するイメージは、自給的性格が濃い、あるいは山中に孤立した生活であるという見方が強い。かつてはY家・O家でも見られたナギハタ穀物生産（ヒエ・アワ・豆類・ソバ等）が自給的農業であったこと、及び、作り地では自然の産物（堅果類・山菜・動物蛋白等）を入手しやすいという事実などにより、作りに対する前記のイメージが形成されたと思われる。しかしながらその一方で、一般に山地集落では米など必要物資購入のための現金収入が必要とされ、そのことが作りの起源と発展にとって大きな要因となってきたという見方もできる。白峰での作り生活の発生時点——いつ、どのような起源で発生したかは不明——においては、確かに自給的かつ孤立的性格が強かったかもしれない。しかし、白峰に商品経済が流入した江戸後期以後——どんなに遅くとも江戸末期以後——には、地下（母村）の居住者のみならず作り従事者、あるいは昭和9年以前のO家の様な山中居住者（永久作りと呼ばれることもある）も各種日常生活用品購入のために現金を入手する必要性が生じたことであろう。それ故、少なくとも江戸末期以後の作り生活においては、換金可能な商品生産に力が入れたと考えられる。別の見方をすると、この時期貧富の差の激しかった山村で資本を集積していった山林地主階層（白峰ではオヤツ様）が養蚕や杉苗生産に力を入れ始めた結果、作り地で商品生産が盛んになったとも考えられる。かつての作り地での商品生産は養蚕と製炭がよく知られているが、この他に、杉苗生産、木工生産（農具・コシキ・板材）、ワサビ栽培、麻織などがあり、これを2～3組合わせた生産構造が見られた。しかしながら、杉苗栽培は労働集約性が高いために製炭と組合わせて行なわれることはほとんどなかった（橋，1981）。

Y家とO家も前記商品生産をいくつか組合わせた商品生産を行っていたが、そこには明らかな違いが認められる。下田原のY家は主に養蚕プラス製炭が現金収入源であったが、小赤谷のO家は養蚕プラス杉苗生産に依存していた。こうした差異は、単にY家とO家個々の作り経営の違いの理由づけだけでは説明しきれない。それは、下田原川流域の作り群と小赤谷を含む赤谷流域の作り群という流域自体の相違によるものである。昭和30年代初期において、下田原川流域での居住者は21戸（地籍内住民が8戸、桑島からの作り13戸）あり、その内製炭を行なう者11戸あり、杉苗生産者はなかった。これに対し、同時期赤谷流域では22戸の居住者（全戸他所からの作り）の内、製炭を行なう者4戸、杉苗生産者は10戸あった（白峰村 1959、橋 1981）。下田原と赤谷の作り群の間でこのような対比が見られたのは両者共に林野産物を商品生産するという特殊な経営形態が昭和30年代になっても比較的多く残っていたからである。白山麓では赤谷流域ほど杉苗生産者が集中する地域は他にはなく、また、下田原ほど製炭業者が遅くまで残っていたのは、尾口村の東荒谷くらいである。

赤谷と下田原各々における商品生産の特徴をよく示しているのが、次の年間月別作業表である。これは、本論の事例となっている下田原と小赤谷において、作り農家の個別調査を加藤（1935）がまとめたものであるが、残念ながらY家、O家以外の事例だと思われる。調査は約50年前であるが、Y家、O家の当主とも調査の記憶はなく、それぞれの地内の別の作り農家の作業表と考えられる。しかしながら、たとえY家、O家以外の事例であっても、下田原では養蚕プラス製炭、小赤谷では養蚕プラス杉苗生産が主流を占めていたことがわかる。そうした地域ごとの相違は50年たった現在の土地利用図においても痕跡が残っており、Y家では現在も稼働している炭焼窯が見られ、O家の裏山では杉苗が栽培されている。また、両家の作り小屋では、二階を中心に養蚕が盛んに行なわれた。

以上の商品生産の特徴の他に、Y家とO家で気付くのは、作り地内にクリの木があることである。

表1 下田原と小赤谷の月別作業種類 (加藤, 1935) より

月別 出作地	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月
白峰村下田原 (周期的出作)	男、除雪、 繭細工、 蚕具製作	同左	男、薪伐採・ 収集・出作地にて	蚕具手入、 女、袖織・ 麻織	男、薪代採・ 地家修繕	女、同前月	入山準備、 出作家手入	畑耕起播種、 焼畑火入	養蚕、畑耕、 桑刈、 養蚕、 鴨脚	植村(稗、 鴨脚)	養蚕、草刈、 畑除草	木炭焼、 養蚕、 木炭焼、 畑除草
白峰村桑島小字小赤谷 (周期的出作)	繭細工(繻、 ワラジ・ 雪靴製作)	上旬休日(正 月) 農具製 作	薪伐採、地 家修理、薪 運搬	薪運搬・整 頓	畑耕起播種	杉苗木床替	稗・鴨脚其 他植付、養 蚕	養蚕、畑除 草	畑除草、中 旬休、早生 取入	畑除草、養 蚕	穀物収穫、 杉苗掘取販 売	休(報恩講 其他) 薪準備、地 家修理

表2 プナ帯における農林業集落の類型

I. 原初的類型
1. 自給的畑作農業+副業 (木工品製造・狩猟・ 自然物採取)
2. 自給的畑作農業+畜産 (牛・馬の生産)
II. 山村における発展類型
1. 自給的畑作農業+林業・製炭+林業賃労働
2. 自給的稲作農業+林業・製炭+林業賃労働
3. 自給的稲作農業+野菜の抑制栽培
4. 野菜の抑制栽培
5. 野菜の抑制栽培+畜産 (酪農・肉牛の生産・ 肥育)
6. 畜産 (酪農・肉牛の生産・肥育)
7. 自給的稲作農業+林業・林業賃労働
8. 3・4・5・6・7+観光事業
III. 平地村における発展類型
1. 商業的稲作農業
2. 商業的稲作農業+果樹栽培
3. 商業的稲作農業+畜産 (酪農・肉牛肥育・ 養豚・養鶏)
4. 商業的畑作農業
5. 商業的畑作農業+畜産 (酪農・肉牛肥育)
6. 畜産 (酪農・肉牛の生産・肥育)

(市川・斎藤, 1979) より

共に樹令 100 年以上経ているが、正確にはわからない。両家の当主とも、「天然に生育していたのではなくて、植栽されたクリの木だろう」と推定している。出作り生活で消費される堅果類としては、クリの他にトチとクルミが代表的であり、これら三種は重要な補助食料となっていた。いわば出作り地の三大堅果の一つであるクリが栽培され、更にこれが大変古くから続いてきたのではないかと推定される (Y 家・O 家当主談) のは、出作り地での食用植物栽培が雑穀以外にもあったことを示唆するのではなからうか。これまでの Y 家、O 家の出作りの事例を通して、共にナギハタという雑穀自給手段に加えて商品生産が盛んであったことが検証された。さらに両家とも植生でいえばプナ帯に立地することが共通している。これは、市川・斎藤 (1979) のいうプナ帯の農林業集落の類型のうち、まさに I-1 と II-1 の段階に該当したことを示している (表 2)。

出作りの起源

かつて、焼畑や出作りの全国的な中心地の一つであった白峰村に今も現存する数少ない出作り生活の特長を本論で紹介した。かつての商品生産形態が今なお Y 家、O 家とも残っており、昔とは大幅に生活が変わったとはいうものの出作り生活は少なくともこれまでは健在であった。しかしながら、こうした出作り生活が次の世代に引継がれる見込みはほとんどなく、Y 家、O 家当主ともその点についてはあまり期待していない。従って、実際の出作り生活を見ることによって、その実態を探ることができるのも白峰村においてさえあと数年のことと思われる。

本論で少しふれたが、出作りの起源については現在のところ明らかにされていない。これまでに、地下の人口増加にともなう耕地不足から出作りが発生したという環境論的説明、ナギハタの耕作形態

の関係から必然的に出作りを行なわざるをえなかったという農業経営的説明がある。

田中・幸田(1927)は、白峰という地下が当初から存在したという前提で、その人口過剰・耕地不足が出作りを発達させ、ついには通年山中に居住する「永久出作り」を生むにいたったとしている。加藤(1935)は、地下の存在を前提にするのは前者と同じであるが、白峰の余剰人口はまず「通い」という形で少し離れた地域へ耕地を求め、ついで夏季のみ耕作地で生活するいわゆる通常の出作りへと変遷し、更にこれが「永久出作り」へと変わったと指摘している。こうした地下の人口増を根拠とする環境論的説明に対し、佐々木(1972)は、「前提となる地下は山中まれにみる大集落であり、それがどのようにして成立したかという問題がある」とし、人口圧を生む大集落の有無にかかわらず中部日本のナギハタ地には出作りが存在することに着目し、出作りを必ず附随するナギハタ型の農場経営の立場から説明した。この他、養蚕・製炭の実施、獣害防止、オヤツ様の奨励といった要素もあるとしている。全体的にみれば、農場経営を含む社会経済的視点から出作りが説明されている。これに対して再び環境論の立場から KAKIUCHI and YAGASAKI (1982) は前述の地下の問題を説明している。まず、白峰が大集落に発展する前、既に周辺山地斜面に農場集落が散在し、その農民が最初は冬の間だけ山をおりて白峰で生活していたが、結局は彼ら農民にとって白峰の方が母村として重要になり、白峰の居住人口は漸次増加した。こうした人口圧により、周辺山地の農地だけでは不足するようになり、しばしば遠隔地に農地を求めた結果、出作りが更に促進されたとしている。

以上の見方はいずれもそれなりの根拠があると思えるが、環境論的説明がなされた最初の二者についてはいずれも白峰のみが説明対象となっている問題がある。つまり、白峰や白山周辺以外の中部地方各地、四国、九州でも出作りが存在することに対して普遍的な説明ができない。

現在ではほとんど消滅寸前の出作りやナギハタについて、その起源を求めるのは難しいが、千葉(1983)は前述の説明とは異なる立場でナギハタを論じた。人口圧により地下から山中に入りこんでナギハタが行なわれたのではなく、白峰には元々ナギハタを行なう生活技術と土地制度があったとし、過去帳をもとにして山中居住(永久出作り)形態が越前側から白峰へ移ってきたと推論している。仮に、こうした山中居住形態を、KAKIUCHI and YAGASAKI (1982) のいう「白峰周辺の山地斜面に散在していた農場」とすると、白峰のような大集落発生の過程、出作りの発生等についてある程度説明がつくのではないか。つまり、地下→出作り→山中定着という居住変遷があったと考えるよりも、千葉や KAKIUCHI・YAGASAKI が言う「山中居住形態」が地下とは別個に存在したと考える方が自然でなかろうか。ナギハタや出作りの起源の経緯がわかっても、その年代を知ることは困難である。現存する古文書では16世紀末までナギハタの歴史を溯ることができるが、もちろんそれ以前にも存在していたことは間違いない。ここでは一応プロセスの推定にとどめたい。

文 献

- 千葉徳爾(1983) 新・地名の研究, 古今書院
 ——(1983) いわゆる「出作り耕作」への疑問, 「はくさん」第11巻第1号, 石川県白山自然保護センター
 市川健夫・斎藤 功(1979) 日本におけるブナ帯農耕試論, 地理24巻12号, 84-102
 岩田憲二・山口一男(1983) 白峰村赤谷川流域における出作り地名と自然条件について, 石川県白山自然保護センター研究報告第9集, 95-98
 KAKIUCHI, G. and YAGASAKI, T. (1982) "Transfarming" in Mountainous Japan: Dezukuri of Shiramine Village at the foot of Mt. Hakusan to rejuvenate regional geography (II), Research and sources unit for regional geography Univ. of Hiroshima, 40-47
 加藤助参(1935) 白山々麓に於ける出作りの研究, 京大農業経済論集, 245-351

佐々木高明 (1972) 日本の焼畑, 古今書院

白峰村 (1959) 部落別民家配置図, 白峰村史下巻 1-38

橘 礼吉 (1981) 白山麓の焼畑による商品的クワジマスギ苗栽培経営, 石川地域研究第3号, 57-79

田中啓爾・幸田清喜 (1927) 白山山麓に於ける出作地帯(-)(-) 地理学評論第3巻4号・5号, 281-298, 382-396

Summary

Owing to the high economic growth in Japan, most mountain villages have begun to lose their traditional industrial structures based on forestry and agriculture. Above all, *dezukuri* (temporary habitation for cultivation) and *yakihata* (slash-and-burn method of agriculture) have almost disappeared for the past 20 years. At present, only a few examples of them can be found.

In this paper, author introduced two *dezukuri* farmsteads which still remain in Shiramine-mura at the foot of Mt. Hakusan. The farmstead of Y-family exists on the riverside of the Shimodawara-gawa. Another farmstead is owned by O-family in Koakadan.

There are apparent differences between the two farmsteads. Both the farmsteads have a *kyāchi* (ordinary field) which is used for cultivating vegetables for home consumption. But, Y-family has a *nanagi* (*yakihata* of kitchen garden type) where radish is grown in an area of about 0.15 hectare. In addition to this, there is also a charcoal kiln in the farmstead of Y-family. On the other hand, O-family has a nursery of cedar in the back of *dezukuri-goya* (hut).

Those types of land-utilization have resulted from the fact that there has been a strong desire to get cash income by commercial products. As a result of such situation in farmstead-management, charcoal and cedar seedling played an important part of income in family. Besides those two commercial products, sericulture was the main source of income in both families.

As for the origin of *dezukuri*, there have been many theories since the prewar days of World War II. In the prewar days, a population theory was insisted by some geographers. It was that *dezukuri* occurred for the lack of arable lands in *jige* (mother village) by the increase of population. Recently some other theories were proposed. One of them is that the management-system of *dezukuri* farmstead could not help demanding wide arable and fallow lands for *yakihata*.

Besides the socio-economic theory, the population theory was published again. According to that theory, farmstead settlements had existed before Shiramine became large, and Shiramine became a large community by the inflow of settlement people. Soon Shiramine became an important village for the people and they began to seek arable land at some distance from Shiramine. That was the origin of *dezukuri*.

The most recent theory is that there has existed the mode of life and landholding system of *dezukuri* and *yakihata* in Shiramine since very old times, and *eikyu-dezukuri* (living system in isolated mountain area all the year) shifted from Echizen District (Fukui Pref.) to Shiramine.

It can be concluded that there have been the *eikyu-dezukuris* which are independent of *jige* for a long time.